

さまざまな魅力に満ちた京浜急行

京急さん、ワタシを雇いませんか？

車内アナウンス、自動音声、ドアの開閉音、走行時の機械音などなど。各電鉄会社の特徴や個性をとらえて、声と喉で、パーフェクトに再現してしまう。なぜこのようなことができる人がこの世にいるのか？

鉄道ものまねの第一人者に、赤きスプリンターはどう映るのか。

マルチものまね芸人

立川真司

●たちかわ・しんじ 1959年大分県生まれ。セメント会社勤務を経て、ものまね芸人へ。電車運転士体験ゲーム「電車でGO!!」シリーズで車掌役の音声を務めるほか、鉄道に関する音声から生活に身近な機械音まで、あらゆる音をものまねて再現する。

ブルートレインに憧れて

——電車のものでまねと聞くと、車掌さんのアナウンスを連想しますが、立川さんの場合は、アナウンスはもちろん、走行音からドア開閉音、駅メロなどあらゆる音と声を模写されているんですね。

電車にまつわるあらゆる音ですね。

僕は勝手に「サウンドものまねパフォーマー」と呼んだりもします。ほかには飛行機も、ジェットエンジン機とプロペラ機の音の違い、機長の放送までやりますし、横断歩道のメロディ音、ガス警報器など生活に密着した機械音もやりますから、あらゆる年代の人に楽しんでもらいたいと考えています。

電車のものでまねをやるようになって

たのは子供のころからです。僕は自分の津久見で生まれまして、津久見には小野田セメント（現・太平洋セメント）の工場があつて、セメント町という地名があるくらい、セメントが町の中心産業なんです。僕もこの会社に就職してサラリーマン生活を送ることになるんですが、ちょうど僕が小学校に入るかどうかぐらいの時期に、東京と九州間を

結ぶ寝台特急列車、ブルートレインが開通しました。

当時としては、最新型の特急列車ですし、誰もが気軽に乗れるわけでもない。憧れの列車でした。一つのハンドルで多くの客車を引く張る運転士さんの姿や、重厚感のある青い車体がかっこよくて、線路沿いの道へよく見に行っていました。

当時はまだのんびりしていた時代でしたから、僕のような子供が電車に向かって手を振ると、運転士さんが警笛で返してくれる。こういうサービス精神旺盛な運転士さんもいます。まず鉄道が好きになりました。

運転士も憧れの職業だったけれど、僕自身はしゃべるのが好きだったから、車掌さんになりたいと思っていたかな。それで車内放送をまねして遊ぶうちに、だんだんものまねもマニアックなものになってくる。

中学時代は、福岡県の久留米に住んでいました。当時は友人たちと列車の写真を撮りに出かけるのが趣味でした。ようやく手に入れたカメラを持って、筑後川にかかる鉄橋のそばで待ち構える。そのころから撮り鉄は多かったですからね。当時は久大本線の特急「ゆふ」や寝台特急列車の「はやぶさ」とかを撮っていたかな。

列車が来るのを待つってスタンバイしている間、僕は特急列車の警笛の音のものでまねをします。すると、その音がした方向に大勢の人がカメラを向ける。当然列車は来ません。

僕と友達は、「おかしかねー、なんで来んとやろーかー」なんてトボケたりしてね（笑）。警笛の音はするのに列車の姿はなし。首をかしげる人たちの表情がおかしかったですね。こんなはずら、僕のメカニック

音のものでまねの原点じゃないかと思えます。

——警笛音がものまねとは思いません。なかつたんですね。いたずらはほかにもあるんですか？

サラリーマン時代、僕は技術部にいました。セメントのプラントを作ったりする際、工事関連の人々と現地で打ち合わせするのに、全国各地へ出張に行っていました。

上司と二人で新幹線に乗る際、普通道だったら上司は窓際の席、部下は通路側に座るものですが、適当な理由をつけて逆に座る。僕が窓側、上司が通路側になります。

僕がトイレで中座して席へ戻ってくる際に、車掌さんの声色を使って検札のものでまねをする。上司は視線を上げもせずに機械的にチケットを出して見せるんですよ。その後、何事もなかったように自分の席に戻つ